

市民がつくる、まちを楽しくする大学

ヒガシヤマト



未来大学

Future University HIGASHIYAMATO

蔵敷チーム NEWS LETTER VOL. 03

01. 第三回目講座内容

●プラネタリウムを通じた市民交流づくりの取り組みを知ろう。

日時:10月27日(土)14:00~17:00

場所:東大和市立郷土博物館

講師:高橋真理子さん(宙先案内人/星空工房アルリシャ代表)

参加者 12名 スタッフ 3名

○高橋真理子さん

高校時代にオーロラやアラスカに憧れ、北海道大学理学部、名古屋大学大学院宇宙理学専攻でオーロラの研究に携わる。2016年より、仲間とともに「星つむぎの村」を立ち上げ、「星で人をつなぎ、ともに幸せをつくろう」をテーマに、ネットワークを広げている。



★自己紹介

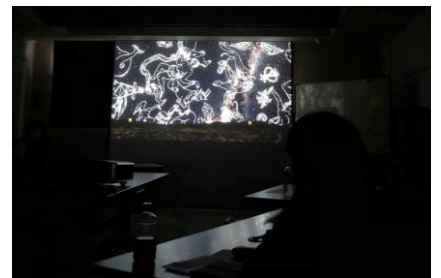
(名前、参加動機:一部抜粋:星空ボランティアをしている。プラネタリウムに興味がある。最近星を見なくなったなあと等)

★導入:広い広い宇宙の話。星を測ることで自分の立ち位置を知る。

「自分がなぜここにいるのか、生きているのか」。

根源的な問いに対しての答えを人は求めている、そこから神話や科学が生まれた。そんな広い宇宙の中で、今日出会ってここにいることが奇跡。

(会議室がプラネタリウムに！感激！→)



★高橋さんのこれまでの取り組みについて

- ・専門を極めるよりも、人と出会うことが好きで、文学・音楽・アートなど好きなジャンルを捨てたくなかった。
- ・科学と社会をつなぐ活動をされている。

〈星をみあげるといこと〉

夢や希望を感じさせる
世界共通の時間の流れを示す(暦)
存在の不思議を感じさせる(ほぼ最初の学問)
遠くから自分を知る(地球を俯瞰する)
時空を超えて同じものを見ることができる。思いをつなぐ。

●星つむぎの歌

星を見上げて想いを言葉にしてみんなでつなげて歌を作ろう。JAXA 宇宙連詩の山梨版をつくった。新月と満月にあわせて発表・公募→リレー形式で連ねていった。のべ 2690 の言葉。平原綾香さんが歌った。



●病院がプラネタリウム

病室から出られない、本当に星を見れない子どもたちにも星を見せたい。いつも天井を眺めている子にその先に広がっている世界を見せたい。手作りのプラネタリウムドームを持って、病院へ行く活動を全国で行っている。

●みんなのプラネタリウム

大阪で、障害のある人、その親御さん、認知症の方、医療従事者、一般市民向けのボランティアをしている団体とのコラボ企画。大阪市役所地下ホールにて、小児医療センターの子ども向けに出張プラネタリウムを行った。

事業計画書より抜粋(実行委員の思い)

…体験させていただいたプラネタリウムに私たちは何度も歓声をあげました。「宇宙空間の中で私達は生きている。この命もこんなに大きな宇宙空間の中で生かされ、そして生まれ変わっていく、悩みはあるけれど、この壮大な宇宙の中の小さな命として、次の世代に命を紡いでいこう」視察に行った私達自身もその空間に感動し、癒され涙しました。

(中略)

宇宙は広い。私達が生きていることは奇跡。今回は、2日間の計画をしましたが、2日目はあいち小児医療センターの子供さんを対象に天井しか見ていない病床の子供さんたちにこの感動がお届けできたらと思い、このことを説明に伺ったところ是非、毎年行って欲しいと要望も頂きました…

●ライトダウンやまなし

2018年で20年目を迎えるイベント。一年に一度、一時間だけ、身の回りの明かりを消して星空を見上げてみよう。まち一帯の電気を消すのに、一軒一軒の民家を訪ねて協力をもらっている。顔の見えるライトダウンとも言われている。

02. まとめ

プラネタリウムを通じた、市民交流、地域活動についてたくさんお話を聞けました。

どんなプラネタリウムになったらもっと良いなとみなさんは考えるでしょうか？

〈高橋さんより〉

- ・何かをしようとする、それは大変だけど、本来博物館は市民のためにあるもの。使い倒した方が良い。
- ・メガスターは星を見せるだけ、しょせんは道具、使うのは人。
それでいったい何を伝えたいのか、誰に伝えたいのか、が大事。

〈その他〉

- ・宇宙を考えることで自分の立ち位置がわかる。広大な宇宙の中で人と出会えるのはやっぱりすごいこと。

〈第四回へつづく〉

